

東京女子因會十五回

四月廿八日並木俱樂部に開催、左に
番組を報す

御所櫻三	千恵子	佳	仙
日吉丸三	佳世子	三	勝
小磯ヶ原	小津賀	紋	敦
油屋お紺	小和光	清	三
先代御殿	若好	清	二
壺坂寺	光助	清	二
千本鮎屋	猿春	三	生
太功記十	福福	勝	八
朝顔宿屋	綾清	駒	登久
卅三間堂	染登	猿	幸
新口村	佳照	清	一
岸姫松三	佳仙	仙	照
野崎村	越道	巴	住
	ツレ	三	勝

場立雛の餘地なく非常の盛會なりき、
全部掛合番組左の如し
菅原車曳之段
櫻丸旭暉、杉王聖玉、時平花月、梅王透
昇、松王やぶき
菅原寺兒屋之段
源藏五勢、戸浪小三島、小太郎花月、千
代花昇、御台若君旭暉、玄番松呂、松王
登一
天網島河庄之段
孫右衛門榮四、亭主透昇、善六松呂、小
春松風、太兵衛うるふ、見物人きく水、
治兵衛千鳥
白石噺揚屋之段
しのぶ生樂、宮里きく水、宗六正風、宮
榮重司、宮城野可昇
夏祭三婦内之段
三婦正風、木葉權きく水、おつき重司、
海風の八やぶき、お辰うるふ
三味線
竹本 雛代
床世話 天登久、大増

竹本雛代後援會

五月廿一日道頓堀俱樂部に開催、満

千秋樂

『いがみの權太』覺書

鳴澤 孝輔

文樂座三月狂言「義經千本櫻」炸屋の段
から權太の動きをノートして見る。遣ひ手
は榮三。かしらは齋藤清二郎氏の文樂人形
圖解によると團七（小團七） 卵子色、髪は
ひつくりである。

◇「此家の惣領いがみの權太」で下手横
幕から出る。頭から冠つた手拭の端を鼻の
下に結んで、夜具縞の袴、懷に入れた兩手を
襟のところからぶつ違へて突出してゐる。
屋臺へ目をつけて直ぐ本手入口の前に立つ
と「門口から乙摩で」となり右足で戸を開
けて「母者人、母者人」と云ひ、そのまゝ
屋臺へ上る。お里の兄様かようお出でを立
身で聞いて首を振り「エ、きよとくしい
其面何ぢや、よう來たがびつくりか、わり
や彌助とうまアーい事」首を正面へまはし
「してゐるさうなが、こりや彌助もよう聞
け、今追はれて居ても、竈の下のはアーい
迄」頸をしやくつてから煙冠の結び目を解
き「おれが物ぢや」と手拭の一方の端をと
つて左の肩へ掛ける「今日は親父の毛虫が

役所へ往たと聞いたによつて、ちと母者人にいふ事があつて来た、二人ながら奥へ失せう」と云つて預聲でもつまむやうに右手を顎にやり、お里が憎惡に顎を突出すので「カアツ」と掛聲をかけて睨み返す。彌助お里が上手の障子屋體へ入る間に門口の戸を締め、掛金をかける。

◆「跡に母親溜息つき」で上祖母親の方を向いて坐り、その繰り言の間、肩から手拭をはづして四つに折り右手に握つて膝の埃などを拂つてベツの悪い仕介。「ヘエ、不幸者め」と云はれてギツクリとなり、母親の顔を下から窺ふことあり「目に角を立て變つたる機嫌に」でもう一度母親の方を窺うて「ウーンぐんにやり」首を垂れ「直ではいかぬといがみの權太」で首を振り「思案しかーへて」右手をついて右膝を一つ、左手をついて左膝を一つ進めて「申し母者人、今晚參つたは無心ではござりませぬ、お暇乞に參りました」と兩手を互ひに握り合せて右膝をのり出して首を震はせる。母親がそりや何でと尋ねるので、首を垂れたまゝ「私は遠い所へ參ります程に」右手で正面向ふを指差して母親の顔を見る「親父様にもお前にも」首を下げ「随分お健でく

としをれかければ」で兩手を下について首を垂れる。

◆「母親の遠い所とはそりや何所へ云々から」根問は親の瞞され小口」で母親の方を窺ふやうにしてから「サアしてやつた」と右膝を叩くと同時に兩足を前に投げ出すが、氣を換へて直ぐに元のおぐらに戻つて「目をしばアたたアアハッハ……アアハッハ……」と手拭の兩端を兩手で肘を張つた形に持ち、眞中を目に當てたまゝ右の肘と右の膝とを前に出し「アアハッハ……」と今度は反對に左の肘と左の膝とを前に出し後何度も目にすりつけ、首を垂れて「親の物は子の物と、お前へこそ無心申せ、竟に人の物箸一本、曲んだ事も致しませぬに不幸の罰か」首を下げ「夜前私は大盗人に逢ひました」右手を前に出して動かし、母親を見て云ひ「その中に代官所へ上げる年貢銀、三貫目といふもの盗み取られ」左の掌を右の手で何度も指差し「言譯もなく仕様もなく」首を振つて「お處刑にあはうよりはと」右手でこなしがあつて「覺悟極めてをります」と云ひ乍ら下手の隅を見て大きな出刃を取り出し、顔を伏せてゐる母親に見てくれとの仕介があるが母親は氣付

かない。「情ない目に逢ひました」と右の片膝を立てかけて出刃を喉元に差付けると、母親は初めて氣がついてその手に取りつき争ひの果とリ上げる「かます袖をば顔に當てしやくり」で正面となつて左の袂を右手でとつて平にして目に當て「イイ、……ヒ、……」と泣いてすりつけ「イイ、……ヒ、……」ともう一度すりつけて「上げて出ぬ」でその袖を下して涙で濡れてゐるかを見「ウウンでぬ、なみツ、だツ」もう一度すりつけて見るがやはり濡れてゐない「鼻が邪魔して目の縁へと、ど、か、ぬ、舌ぞ、うらめしき」左袖を母親の方に對して屏風にしておをバクつかせて舌を出す心で、右手で唾を目につけてから兩手を當て泣く。

◆「母親が災難に遭ふも親の罰と云ふ間兩手を膝において首を垂れてゐて「ア、イ……」と右手に握つた手拭で目を拭き「思ひ知つてはをりますけれど、どうで死なねばなりますまい」右の片膝を立てかけて兩手に端を握つた手拭で喉首を釣り上げて見せると、母親は「コリヤヤい」とその手拭を奪ふとするので、他の端が權太の手に残つて下手へ兩足を投げ出して仰向けとなつて手拭を母親と引き合つた形となり「ああ……

◆：「地獄の種の三頁目、跡をくろめて持つて出で」で母親が金包を持つて正面に出ると權太も一緒に出て「味いわるぢや」と膝を打つてから右の片膝を立て、左手で母親の手許を指差し、立上つて下手の欄から一つの鮎桶を持ち出して、これに金包を入れる。母親が權太の肩を叩いて、これで目立たぬ提げて去ねといふので、正面向ふに目を移してから母親と顔を見合せて頷き、鮎桶を左手に取つて立上り門口へ行くと、「苦い爺親彌左衛門」となり、戻つた明けいゝと戸を叩くので、ギツクリ「南無三親父と内に轉倒狼狽へ廻り」で元の位置へ戻

◆彌助が出て彌左衛門との間に述べ懷があり、讀いてお里と枕の件となつて、若葉内侍、六代君が出る。梶原が此所へ來ると觸れて來るので、維盛等は上市村へ落ちて行く。「様子を聞いたかいがみの權太」の

「勝手口より」で以前の暖簾を分けて諸肌脱ぎ鉢巻姿で、右足を踏出すと兩手を大きく左右に展げて見得。「お觸れのあつた内侍六代維盛彌助めせしめてくれん」と兩手を大きく後の帶の所へ廻して兩の膝頭をトントンと上げ下げて尻から上げて駈出して下されと云ふのを聞かず突きやり、正面となり腰を落して鉢巻を〆め直し「大金になる大仕事邪魔ひろぐな」と立ち上つて下手へ駈出す、お里がその左足に取りつくのを脱返し「最前置きし銀の鉢桶これ忘れは」と棚の鉢桶を持ち出して一旦下にお

◇…彌左衛門が後を追ふと梶原が

来る。彌左衛門夫婦が夫々の思惑から一つの詐桶を明けやう、明けさすまいと争ふところへ「維盛夫婦餓鬼奴まで、いがみの權太が生捕つたり討取つたり」となり「いがみの權太は厳めしく」で下手の横幕、ら權太、以前の姿で小せん、善太を内侍、若君君にしたて、猿轡を咬ませ、後手に繩をかけて右手に引連れ、左手にむき出しの維盛の首を掲げて出る。「目通りにどつかと引つすゑ」で繩付を下手寄りに坐らせ、權太は立身で屋體の内の堀原に向つて「親父の賣僧が」と云つて正面となり「三位維盛を熊野浦より連れ歸り……彌助と名を替へ」右手を開いてかざし「……ほてくろしい御陰鑿首を振り」「生捕つて面恥と存じたに思ひの、外手強い奴、村の者の手をつて」右手を動かし「やうく」と討取り首に致して持參

御賞檢」と左手の首に右手をかけて梶原の方へ差出さうとすると下手寄りで捕手二人に手を捕られた彌左衛門が「極道者奴」(人形道玉藏の詞)といつて權太の方へ寄らうとするので權太はたじろぐ。捕手は彌左衛門を納戸の内へ連れて入る。改めて梶原の前に進んで梶原のところへ首を据ゑる。梶原の詞「ヲ、成程、刺りこぼち彌助といふとは存じながら云々」の間、正面向きに坐つて鉢巻をはづし、顔の汗を拭き、それから首筋、胸、脇の下などを拭いて、その手拭を二つに折つて風を入れる心で振廻す。「出来いた」と聞いて一寸その手を止めて梶原の方へ氣を遣るが、再び振廻し「内侍六代生捕つたな」でギツクリとなつて梶原の方を窺ひ見ると、床は待合せとなる。善太と小せんとの間に坐つて二人の背に兩手をかけて二人を見下すと善太が顔を上げて名残を惜しむので、權太もウレヒを見せ目を閉じ、氣を換へて起上つて「ソレ」と掛聲で二人を梶原の方へ突出す。權太はトン／＼と足拍子を入れて後向きとなり背中へ斜に手拭をかけて汗を拭くのは、居たまらぬ心を紛はすのであらう。その間に梶原のハテよい器量云々がある。

◆…屋體に上り兩手を膝において梶原に相對すると、褒美には親の命を救ふといふので「ブ、イヤ／＼申し、親の命ぐらゐを救して貰ふと思うて此勳は致しませぬ」と顎をしやくる。親の命はとられても褒美が欲しいかで、一膝進め「ハテあの和郎の命は」納戸の方へこなしがあつて「あの和郎と相對、私にはとかア／＼」右手を伸して二度程握つて見せ「おーかつねー」兩手を互ひにとり合つて首を振る。梶原が陣羽織を脱いで與へる。と「佛頂面」で狼狽で、梶原の前に据ゑた首を兩手で抱へて下手向きとなるが「……鎌倉へ持來らば金銀と釣換」と聞かされ、首を梶原の方へひねつてから上手に向き直り、首を元の所へ戻し、陣羽織を兩手に取り上げ「出来た／＼當世術が流行によつて二重取をさせぬ分別。アよいしたもの」と首を左にまはして陣羽織を着る。梶原が「コリヤ權太」と呼ぶのでトン／＼と足拍子を入れて梶原の方に向くと、彌左衛門一家の奴等暫く汝に預ると云ふので兩手を膝に突張つて「イヤモ御氣遣ひなされますな、貧乏ゆるぎもへん」右の掌で鼻の先を撫で、體を前後に揺り「さーせませぬわい」となる。

◆…梶原がハテ扱て健氣な男めと權太に近づいて肩を叩くので顔を見合せて、氣まりの悪い心で陣羽織を頭から被る。「繩付イー」となつて陣羽織から頭を出して腰を浮かせて見送ると、小せんの振返るのと顔が合つてウレヒを見せ、再び陣羽織を頭から被る。「引立て立歸る」で陣羽織を脱ぎ捨て、兩足を船底に下し、右手を上げて「ア、コレ／＼其序に褒美の銀忘れまいぞ」とウレヒになつて首を垂れ、もう一度顔を上げて見送る。

◆…「油斷見合せ彌左衛門憎さも憎しと引抱へ／＼と突込む娘の及」で彌左衛門が下手から權太の左の脇腹に脇差を突刺す。權太腰を落し右足を投出した形となり、頭を前後に振るとさんばら髪、左手で裏口を押へ右手を上げて苦しむ。母親が上手から取りつく。彌左衛門「……大事の維盛様を殺し、内侍様や若君をよう鎌倉へ渡したな」と突込んだ脇差に力を入れるので、兩手を上げて震はせ「……三千世界に子を殺す親といふはおればかり」で面を伏せ「……適れ手柄な因果者によろ仕をつた」又も割るので、その度毎に體を左に傾けては右手を上げて震はせ、右に傾けては左手を震はせ

もう一度左に傾けて右手を震はせて苦しむ
「いがみにいがみし權太郎双物を押へて」
左手を下につき右手で脇差を押へてから「
ブル……」と震ひ「ヒイ〜」肩で息「こ
れ」と力を入れて「親爺殿」「何ぢやい」と
彌左衛門が受けるので、右手を父親の片頬
にかけて力強く押しやると彌左衛門は脇差
にかけた手を離す。「こなたの力で維盛を助
ける事は叶はぬ〜」と下手の彌左衛門の
方に向つて折れたやうに體を屈める。彌左
衛門が怒り立つて身代りの首を入れた鮎桶
の蓋をとると銀が出るので吃驚する。

◇：「手負は額を打眺め」首を振つて體
を起し「おいとしや親父様、私が性根が惡
るさに御相談の相手もなく」右手を上げや
うとして傷口に當て「前髪を首を總髪にし
て渡さうとは了簡違ひのあぶない所」彌左
衛門の額を見乍ら首を振り、そのまゝその
首を垂れる「梶原程の侍が」體を起して「彌
助といふて青二才の男に仕立てある事を」
右手で自分の額を丸く搔でるやうにして「
知らいで討手に來ませうか」體を震はせ「そ
れといはぬは彼方もたくみ。維盛様御夫婦
の路銀にせんと盗んだ銀」右手を二度程握

つて見せ「重いを證據に取違へた鮎桶明け
て見たれば中には首」左の掌を右手で指差
し「はつと思へど」兩手を脇に引いて「こ
れ幸ひ」と右手を下につき「月代剃つて突
きつけたはやつぱりお前の仕込みの首」と
彌左衛門の方に向いて左手で上手を指差し
トン〜と膝を進める。その性根で御臺若
君を何故鎌倉へ渡したと詰寄られるので「
サそのお二人と見えたはこの權太郎が女房
伴」一寸右手を上げて直ぐ傷口を押へて體
を屈める。維盛様御夫婦若君は何處にで
ろ、逢せませう」と正面ににじり出で、右
足を柵から前に投げ出し、右手に一文笛を
とつて口に咬へ左手を膝に支へて、「吹き
立つれば」でビ、ビイ……と吹くと傷口が
痛む心で兩袖をかき合せて押へ、後力弱く
吹き續ける。内侍、六代は小せん、善太の
なりをして維盛と共に戻つて來て權太の有
様を嘆く。

◇：母親が常が常なら連合がむざと手紙
も負せまいと悩むので、權太は體を震はせ
て起し、母親の方に向いて兩手をつき「ヤ
レ其お悔み無用々々」となり、體を起して
「常が常なら梶原が身替り喰うては歸りま
せぬ。まだそれさへも疑うて、親の命を衰

美にくれう、恠いといふと早や」右手を胸
に當て「詮議に詮議をかける所存、いがみ
と見た故油斷して一ぱい喰うて歸りしは」

右手を前から下手の方へ差し「禍も三年と」
右手を前に出し左手を前に出して眺め「惡
い性根の年の明時、生れついて諸勝負に魂
奪はれ」右手を出し「今日も彼方を」左手
で内侍の方を指差し「編取つたる荷物の内
恭しき高位の繪姿、彌助が額に生寫」右手
をす前に出し「合點がいかぬと」首を振
り「母人へ銀の無心を囀に入込み忍んで聞
けば」納戸の方へこなし「維盛卿。御身に
迫る難儀の段々」左手を下につき右手を平
に頂いて首を垂れる。

◇：「此度性根改めずば何時親人の御機
嫌に預る時もあるまいと」下手彌左衛門の
方に向き直り右手を一寸上げて首を垂れ「
折つて代へたる惡事の裏」正面となり「維
盛様の首はあつても内侍若君の代りに立つ
る人もなく」左手で内侍、若君を指差して
額は彌左衛門の方に向け「途方にくれし折
柄に女房小せんが伴を連れ……私と善太を
コレかうと」兩手を後へまはしてウレヒを
見せ「手を廻すれば伴も」左手をついて
彌左衛門の方に向き「母様と一所にと共に

廻して縛り繩、かけても手ははづれ」
左手に右手を重ねて向ふへのめらせ「結んだ繩もしやらほどけ」もう一度重ねてのめらせ「いがんだおれが直な子を」右手を胸に當て「持つたは何の因果ぢやと」右手を下について首を左から廻はし「思うては泣きしめては泣き」體を起して右手を前に突出して震はせ「後手にしたその時は」左手を前に出し「心は」右足を踏出し傷口の痛む心で兩手を腹に當て「鬼でも蛇心でも」首を左から正面に廻はして來て「こたへ兼ねたる血の涙」上手に向き直り奥に泣いてゐる母親へ右手を上げて仕方「不便や女房も」再び下手の彌左衛門の方に向いて左手を上げて仕方。「わつと一聲その時に血を」握つた手を双方から前に突出し「吐きました」と兩手を上に上げトン／＼と足拍子を入れて體を搖すりト／＼兩手で傷口を押へる。

◇…彌左衛門夫婦の嘆きがあり、維盛が梶原の預けておいた陣羽織を引裂いて一門の恨を晴さうとすると羽織の中から袈裟と珠數とが現はれる。「手負の樺太道出で摺寄り」で體を起して維盛の方に向ひ兩手をつき「及ばぬ智恵で梶原を謀つたと思うた

が」右手を上げ「あつちは何にも皆合點、思へば是迄調つたも後は命を騙らるゝ種と知らざる淺ましき」と上手の奥のお里を見返り、又下手の彌左衛門を見て首を垂れるこゝで榮三が抜けて黒衣の遣ひ手に代る。

◇…幕切「思ひはいづれ大和路や」で彌左衛門が梶の前に踞つくと樺太は靜かに體を起して名残を惜しむ。(初日見物)

女子因會

春季大會評 (一)

—東朝と素八—(四月十六日)

本誌内人 内田三千三

仄ぬくい春夜、會場の日本橋俱樂部へ行くとき……

越駒の「鮎屋」が聴衆を魅了しうつとりさせてゐたが私は餘り感心出来なかつた。この人など昔はモット藝に良い意味の霸氣があつた……何かしら淨瑠璃への熱情と氣魄を失つて耽美的な

技巧趣味に、ナルく自遊してゐる感を與へられる。

上つ面をナデ廻して、深さに留意せぬ演出が、折角の技巧を單に圓く洗練された巧さへののみ局限させて、小味な世界に獨り楽しんでゐる如き藝態が惜しい……何も、氣張ることや力きむことを要望するのではないが、圓巧な技巧の枠内で亂舞する語り口に、より人間的な深味と性格的な面白さを肉付けする方が灰汁の抜けた越駒の藝能に錆と枯淡さを創造させるのではなからうかと婆心乍ら想察した。

圓雀清二の「紙治」この一段では練巧な清二の絃が圓雀をリードする師清一の長所を自家藥籠中に収めた撥捌きに暖か味があつて親しめる。多少情感性の濃い弾き方だが、大夫を勞はつて自分も生かす周密な藝姿だ、それとこの人は場馴れがしてゐて、自分の藝の寸法をピッタリ舞臺に當嵌める老練さがある。